

平成19年度資源評価票(ダイジェスト版)

イカナゴ類

イカナゴ *Ammodytes personatus*

キタイカナゴ *A. hexapterus*

系群名 宗谷海峡

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命: 6歳以上

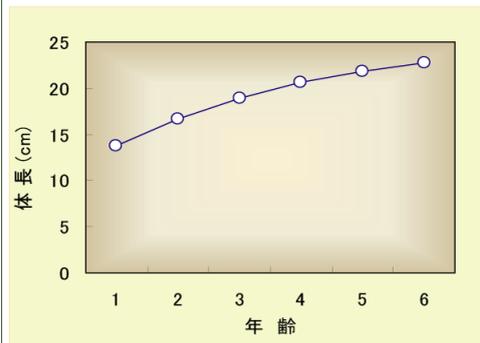
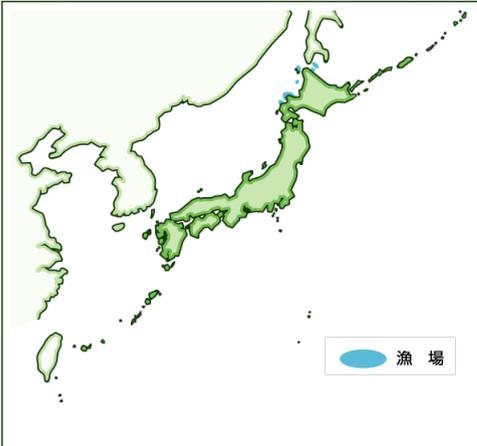
成熟開始年齢: 2歳

産卵期・産卵場: イカナゴは春季(3月下旬~5月下旬)で、稚内、枝幸および利尻・礼文島周辺の沿岸域、キタイカナゴは初冬(11月下旬~12月)で、サハリン周辺の沿岸域

索餌期・索餌場: 主に宗谷海峡周辺の水深40~80mの砂礫地帯

食性: 未成魚はカイアシ類などの浮遊性甲殻類、珪藻類、成魚はカイアシ類、端脚類、オキアミ類、十脚類、矢虫類、魚類

捕食者: マダラなどの大型の魚類、海鳥類、海産ほ乳類

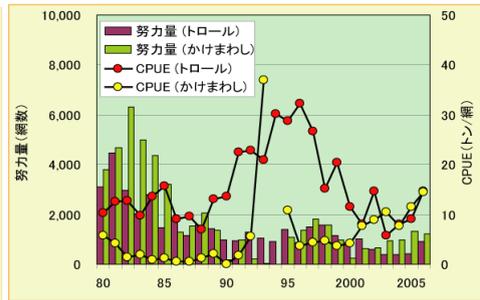
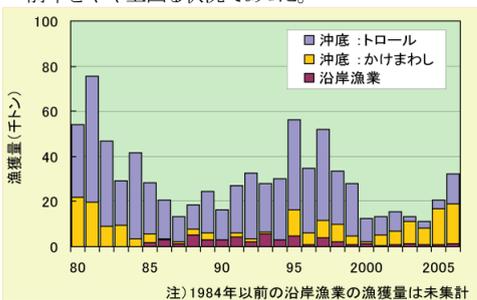


漁業の特徴

宗谷海峡周辺に分布するイカナゴ類には、イカナゴとキタイカナゴの2種が含まれているが、漁獲物ではこれらが区別されていない。漁獲物のほとんどは、沖合底びき網(沖底)によって漁獲されている。沖底は、6~9月に1~6歳魚を漁獲する。沿岸漁業は、主に4~7月に0~3歳魚を漁獲している。なお、沖底漁業は、養殖用餌料としての需要を考慮しながら行われる。

漁獲の動向

沖底の漁獲量は、1988年以降増加傾向を示し、1995年には52千トンに達した。その後は減少傾向に転じ、2000年代に入ってから10千~15千トンと低い水準で推移していた。しかし、2006年の漁獲量は前年を大きく上回る31千トンであった。沿岸漁業も1999年以降、1千トン前後の低い水準で推移していた。2006年の漁獲量も1.2千トンであり、前年をやや上回る状況であった。



資源評価法

主要漁業である沖底の漁獲量は、需要を考慮して行われるため、資源水準を反映していない。またCPUEも、本資源が日本~ロシア水域に広く分布するため、資源全体の水準を反映しているかは不明である。また、減船、漁場の縮小、かけまわしとトロールの漁獲量の逆転などの影響で、長期的な資源水準の比較は困難である。そこで、トロールの努力量が比較的安定していた1985年以降のCPUEを用いて評価を行った。

資源状態

トロールのCPUEは、1989年以降は増加傾向を示し、1996年には32.3トン/網に達した。しかし、1997年以降は減少傾向に転じ、2003年には1980年以降最低の5.8トン/網となった。2006年は前年を大きく上回る14.7トン/網に増加した。漁獲物体長組成の比較から、近年は豊度の高い年級群が発生しておらず、低水準ながら安定した加入があったと推測されるが、2006年の漁獲物は小型個体の割合が低く、加入状況が2005年とは異なると考えられた。これらCPUEの動向、漁獲物体長組成などを総合して判断した結果、資源水準は中位、動向は横ばいと推定された。



管理方策

近年のイカナゴ類の資源水準の低下は、豊度の高い年級群が加入していないことによると考えられる。このような状況の下、2004年から北海道における資源回復計画の対象となり、稚内のトロール船2隻が減船された。近年の主力漁業であるかけまわしのCPUEは、2001年以降比較的高い水準で維持されている。また、2002年以降は、20cm未満の小型個体が出現していることから、低水準ながら安定した加入があると考えられる。そのため、現状の漁獲努力量であれば、資源水準を急激に悪化させるような状況では無いと判断される。しかし、CPUEの低下等が見られた場合には、漁獲努力量の削減対策等を講じる必要がある。

資源評価のまとめ

- 漁業構造の変化などにより、近年の沖底のCPUEが資源全体の水準を反映しているかは不明
- 漁獲物体長組成から加入状況は低位で安定と判断
- 努力量の安定していた1985年以降のトロールのCPUEの動向および近年の漁獲物体長組成などを総合して、資源水準は中位、動向は横ばいと判断

管理方策のまとめ

- 加入状況は低位安定のため、現状の漁獲努力量の継続で、資源状態が急激に悪化する状況ではない
- 北海道は、2004年からイカナゴを資源回復計画の対象種とした

資源評価は毎年更新されます。